

「立木さん」として親しまれ、厄除け観音として有名な大津市石山南郷町の立木観音（浄土宗安養寺）は、瀬田川の西岸、袴腰山から南へ延びる丘陵上にあります。毎月17日が縁日で、年初年末の初立木、しまい立木と、厄除け祈願の大護摩修行が行われる2月3日の節分会には特に多くの参詣客で賑います。

河畔の国道422号から観音堂までは急峻な700段あまりの石段が続きます。汗がふき出す石段の途中に「立木観世音御縁起」が掲げられています。

縁起によると、「嵯峨天皇の御代弘仁6年（815）、弘法大師が42歳のとき諸国行脚の途中、瀬田川の対岸からこの地に光を放つ霊木を見つけたものの川を渡れず佇んでいると、白い雄鹿が忽然と姿をあらわし、大師を背にのせて瀬田川を飛び渡って霊木へと導いたあと、観世音へと姿を変えて光を放ちながら空へ

消えた。大師はこの地が自分にとつて縁ある霊地として、衆生の諸々の厄難厄病除けを祈願してその霊木に自分の身長にあわせて五尺三寸の観世音を彫刻し、他の仏像とあわせて堂宇に安置したところ、参詣した人々の厄除け・諸願成就がかなわないことはなかった」とあります。

この内容を詳しく見ていきましょう。まず、渡りあぐねていた瀬田川については、瀬田唐橋から約7キロメートル下流の川幅は、明治35年から41年まで行われた浚渫工事で109坪になっていますが、関津付近から下流は川幅が狭く急流となり、溪谷のような景色がひろがります。

この谷は桜谷（佐久那谷・佐久良谷・佐久奈谷）とよばれ、昭和39年に天ヶ瀬ダムが

## 立木観音



立木観音

完成して水位が上昇するまでは、米泔岩、曲り淵、桜谷の滝など奇岩が多い景勝地で、激流が渦巻いていたそうです。弘法大師を背にのせて跳んだ白鹿の伝説にちなんで「鹿跳」とよばれるこの景勝地には鹿の爪あとのような模様があり庭石として珍重から

れている岩を見ることができています。なかには中世の遊行僧である高野聖などの足跡も含まれるとされています。

弘法大師は対岸から霊木を見つけたとすると、妙見山（202坪）付近からみていたこととなります。妙見山の北東には関津峠があり、古代の東山道や田原道は付近を通っていたと推定されています。

す。この付近に、天安元年（857）、平安京遷都による交通体系の変化により、相坂（逢坂）・龍花（龍華）とともに大石関が設けられています。

また、瀬田川の流れば立木観音から約500坪下流で西に屈曲し、東から信楽川、南から大石川が相次いで合流して醍醐山地を切り込むように宇治へと流れます。古来、川に沿って人々の往来がありました。この地から瀬田川沿いに下ると宇治（山城）方面、大石川沿いには宇治田原（山城・奈良）方面、信楽川沿いには甲賀さらには伊賀方面へと通じており、まさに交通の要衝ということができそうです。

諸国を行脚した弘法大師は全国各地に伝説を数多く残しています。なかには中世の遊行僧である高野聖などの足跡も含まれるとされています。が、ともあれ近江の南の玄関口ともいべき交通の要衝地から見て、激流渦巻く桜谷深谷の景勝地の向こう側、西方に位置する立木観音は、観音菩薩の極楽浄土として建立されたといえるのではないでしようか。

# 菩薩の極楽浄土として建立